

# 留学報告書

## I. 基本情報

留学先： スイス連邦工科大学ローザンヌ校 (École Polytechnique Fédérale de Lausanne, 以下EPFL)  
場所： スイス・ローザンヌ  
留学期間： 2014年1月21日～5月31日(一学期)  
所属： 建築  
奨学金： 32万円 (東京大学海外派遣奨学金 8万/月 × 4ヶ月)

## II. 準備期間

### 2.1 事務手続きについて

工学系研究科の協定校への交換留学なので、ほとんどの問い合わせと事務的手続きを工学8号館の一階にある国際交流チーム(OIEC)を通して行いました。協定校のリストやそれぞれの締め切りなどの情報は、OIECのウェブサイト上でもチェック可能ですが、窓口に尋ねるとより最新かつ詳細な情報を手に入れられると思いました。自分の場合、留学する時期はM2前期(2014年春学期)の一学期のみで、すなわち留学先で学年度の後期に当たる時期になるため、協定校によっては枠が残っていない場合がありました。また、留学先での専攻は、EPFLの場合、東京大学で所属しているのと同じ専攻(私の場合は建築)に志望することが必須でした。申請については、EPFLのウェブサイト上で直接行った後、東大側が要求する必要書類をOIECに提出する形でした。一～二週間くらいでOIECからEPFLの入学許可書をもらいました。

### 2.2 準備と語学について

大学間協定に基づく交換留学なので、申請するまでの準備が特に必要ありませんでした。学部以来の成績証明書とTOEFLの成績を提出する必要あるが、TOEFLの受験料が高いため、私は高校時代に受験したTOEFL iBTのスコアシートを提出しました。また、EPFLはフランス語圏にあるため、許可されてから渡航までの3ヶ月間にフランス語を独学しました。私はフランス語の初心者だったが、イタリア語の基礎があるため、文法や語彙については短期間で習得できました。とはいっても、行く前にEPFLでどれだけフランス語が用いられるかは把握できず、東大側の研究室のプロジェクトにも取り組んでいたので、フランス語を日常会話レベルにしか上達できませんでした。しかし、実際留学先では様々な原因によりほぼフランス語でしたので、留学期間を通して非常に苦労でした。

## III. 留学期間

### 3.1 EPFLについて

EPFLは2つのスイス連邦工科大学の一つで、フランス語圏のローザンヌ市の郊外にキャンパスがあります。ドイツ語圏にある姉妹校ETHZと似たような教育システムを持ち、ヨーロッパでトップレベルの工科大学です。特に建築の分野では、フランスやイタリア、ドイツなどの近隣諸国で第一線で活躍している建築家や研究者がEPFLとETHZに招かれ、教育のレベルはヨーロッパ随一だと言われます。また、スタジオ・ムンバイのBijoy Jain氏やアトリエ・ワンの塚本由晴氏など国際的に人気な建築家がゲストとして迎え入れ、週1程度でレクチャーが行われており、学生にとってとても刺激を受ける雰囲気でした。さらに、ハード面においても、日本の大学より遥かに学生数が多いこともあり、Atelier des Maquettes(模型工房)やSalle informatique(パソコン室)、Output Center(印刷室)などが充実しており、非常に便利でした。

### 3.2 学業について

建築専攻で履修できる教育科目は、主にCours(授業)、Atelier de Projet(建築設計スタジオ)とUE(建築以外の小スタジオみたいな課題)に分かれます。スイスでは学生が研究室に配属されなく、修士の学生も学部生と同様に授業とスタジオをメインに取り込むシステムとなっているため、日本の大学より豊富かつ多様なカリキュラムが用意されています。ただし、授業の9割以上がフランス語で行われており、EPFLの他の学科や、ETHZの建築専攻と比べると英語の通用度が低いことが実情であり、アカデミックレベル以上のフランス語ができないと授業の選択がかなり限定されてしまいます。

一方、建築設計においてはそれぞれカラーが異なるスタジオが多数開講され、日本の大学より選択の幅が広いと感じました。私の場合は、東大での研究と関連性のあるアーバニズムのスタジオを履修しました。スタジオマスターのパオラ・ヴィガノーがGSDでも教えていたヨーロッパで有名なアーバニストだし、課題の内容もなかなか興味深いでした。ただし、やはりレクチャーもエスキスもすべてフランス語の上、所属した3人グループにフランス語しかできないメンバーがいることもあり、セメスターを通して精神的に大きなストレスを抱きました。とはいえ、スタジオマスターがドイツ語圏出身など、公式言語が英語のスタジオもあるし、グループ設計でもグループによってメンバー全員が英語かドイツ語ができる場合が珍しくないので、スタジオ選びとグループ分けにさえ注意すれば、フランス語ができなくてもコミュニケーションで無駄に苦労せずに済むことができるとわかりました。

建築設計スタジオのほかにUEと呼ばれる小さなスタジオもあるが、建築ではなく、歴史や、美術、映画、プログラミングなど、建築設計にヒントを与えるような諸分野における多彩な課題です。ただし、作業量が多く、現地の学生も履修しない人が多いようです。

### 3.3 語学について

EPFLではCentre des Langues (CDL)という語学センターがあり、フランス語をはじめ、ドイツ語、英語、イタリア語の授業が充実しています。ただし、時間帯が専門授業とかぶるケースが多く、実際に建築のスタジオと語学の授業を並行して履修したが、フランス語を勉強する余裕が殆どありませんでした。しかし、日々フランス語の環境に浸かっていたため、あまり話せなくても日常会話や建築の専門用語を聞き取れるようになりました。

ほかに、二人がペアとなって、お互いに自分の言語を教え合うタンデム制度もあるようです。

### 3.4 生活について

ローザンヌは人口がわずか13万人の小さな都市ですが、スイスのフランス語圏の中心的な存在であるため、生活に必要なものをほぼ町中で手に入れることができます。ただし、スイスの物価が非常に高く、言い換えれば同じ生活費だと生活水準が東京よりかなり低かったです。

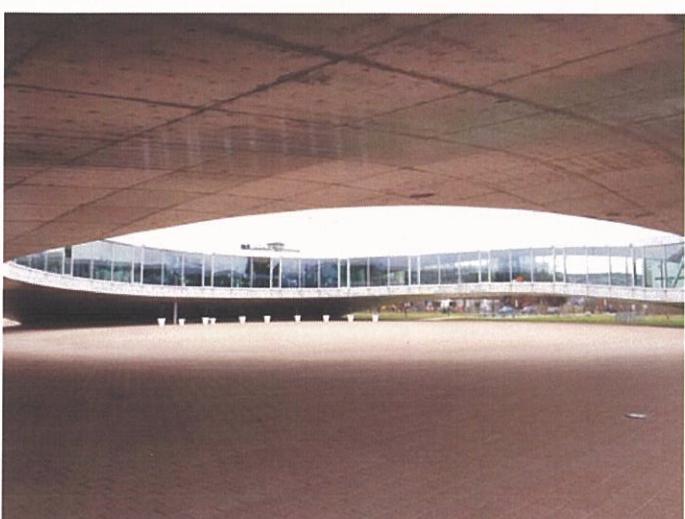


図1\_SANAAが設計したRolex Learning Center



図2\_スタジオプロジェクトの敷地としたアルプスの集落



図3\_ローザンヌの代表的な風景: レマン湖



図4\_建築棟で行われるベビーフットの試合

食事に関しては、フードコートのような手軽に温かい料理を食べれる場所がないので、自炊する時間がない繁忙期ではスーパーでパンを買うか、キャンパス内の屋台で売っているピザやケバブを食べていました。学食は高い上に美味しいいため、あまり利用しませんでした。

住む場所は大学側が用意してくれた学生寮で、家賃は月600CHF (約7万円 2014年6月当時)で、バストイレをシェアするタイプでした。大学から地下鉄で40分程度であり、終電が23時半くらいなので、学校が忙しくなったら少し不便でした。ただ、ローザンヌとジュネーブは住宅不足で社会問題にまでなっているので、寮に入れなかつたら民間アパートを探すのが極めて難しいようです。

### 3.5 アクティビティについて

EPFLでは、世界中から学生が集まっており、学生団体により多彩なイベントが企画されています。残念ながら私はそのようなイベントに参加する余裕はありませんでした。ただ、友達のホームパーティの数回の参加や、イースター休みを利用して近隣諸国への旅行などで、わずか5ヶ月間のヨーロッパでの生活を最大限に楽しめることができました。